

文壇資料

本郷菊富士ホテル

近藤富枝

講談社

文壇資料

本郷菊富士ホテル

近藤富枝

講談社

© 1974

TOMIE KONDO

第1刷 昭和49年10月20日

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

文壇資料

本郷菊富士ホテル

著者 近藤富枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替東京 3930

電話 東京(945)1111

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

定価はカバーに表示してあります (セ)

はじめに

戦前、本郷菊坂台上にあった菊富士ホテルは、その特異な雰囲気を、かつてここを仕事場として親しんだ作家の宇野浩二や広津和郎などの筆により、さまざまに伝えられている。そして宇野浩二はいつかこの風変りな高等下宿と、そこに泊っている人々のことを元にして、バルザックの「ゴリオ爺さん」に匹敵する本格長編を書いてみたいと息ごみながら、ついに夢を果さなかった。

菊富士ホテルの不思議さは、大正三年の開業から昭和十九年の終業まで、わずか三十年の歴史のうち、正宗白鳥、真山青果、大石七分、大杉栄、伊藤野枝、羽太銳二^{はぶと}、竹久夢二、谷崎潤一郎、増富平蔵、兼常清佐、三宅周太郎、高田保、石川淳、尾崎士郎、宇野千代、宇野浩二、直木三十五、田中純、前田河広一郎、三木清、福本和夫、広津和郎、中条（宮本）百合子、湯浅芳子、石割松太郎、菅谷北斗星、川崎備寛、間宮茂輔、坂口安吾などの文筆に関係ある人びと、俳優では片岡我童、中村雀右衛門、政治家では青木一男、インド首相となったシャストリー、また外国人学者ではソ連のコンラド、ネフスキー、プレトネフ、イギリスの詩人ブランドンなど、ひとかどの人物が

つぎつぎと宿泊していることである。

しかも宇野浩二の六年、広津和郎の十年のように、長く腰をすえホテルを我が家のごとく振舞った人々も少なくないし、その他、名は挙げなかったが数ヶ月の逗留をした文化人たちは枚挙にいとまない。かつて一流出版社の編集者の入社テストに、菊富士ホテルが出題されたというのも、うなずかれることである。

大正時代を暗黒時代と考える人はもういない。それどころか昭和初頭へかけて、文学史的には最高に豊饒であり、「青鞥」の運動や、築地小劇場の開場もあり、労働運動も台頭し、あらゆる面での近代化が進み、さらにモダニズムへの移行の見られる楽しい時代であったことが、いまは証明されている。そして菊富士ホテルの住人たちの間でかもされた雰囲気も、またそうした時代の豊かさを反映してか、自由で放縦で、ずばらで混沌としていた。

それは、内地雑居を思わせる各国人共棲の空気が、いつか自然に醸成したものなのだろうか、あるいはこのユートピアに安住した文士たちが、思い切って羽を伸ばし、その盛名を慕って菊富士ホテル入りをした文学青年たちによって、いよいよ助長されたのだろうか。または経営者羽根田幸之助、きくえ夫妻の性格が、そのまま下宿の空気に反映したものでしょうか……。

ともあれ、埋もれたこのホテルの歴史を掘りおこすことが、また同時代の文壇史の一端を顕らかにすることを信じて、私はペンを握ったのである。

目次

はじめに 1

第一章 菊富士ホテルの誕生

.....九

ある夏の日 10

羽根田幸之助の上京 15

菊富士楼 19

幸之助のアイデア商法 25

東京大正博覧会 27

第二章 エキゾチックな雰囲気の中で

.....三

第一次世界大戦 38

ロシアの東洋学者たち 42

コンラドの恋 46

ネフスキーと肅清 48

オレスト・ド・プレトネル 53

大杉栄と大石七分 56

一犯一語 58

伊藤野枝 61

日蔭茶屋事件 65

リスの毛皮と谷崎潤一郎 72

夢多き男 77

食堂がきらいだった夢二 84

名作「黒船屋」のモデル 89

天才翻訳家増富 95

女房のようにピアノを愛した男 101

第三章

宇野浩二をめぐる人たち

..... 105

梅の間の客 106

宇野浩二菊富士ホテルに入る 111

ハイカラ八笑人 115

地下の食堂 124

浩二の世界 129

関東大震災 136

ゲイクラブ 144

直木の貧乏時代 147

第四章

マルキストと高等遊民たち……………三

広津和郎のかけおち事件 154

青桐のみえる部屋 161

福本和夫の入居 166

混乱の時代 168

女給の歌 174

ロシア新婦朝の女たち 180

広津の女難 188

第五章 塔の部屋……………一五

風の音 196

矢田津世子 202

一本の蘂 209

炎上 217

おわりに 221

年譜 225

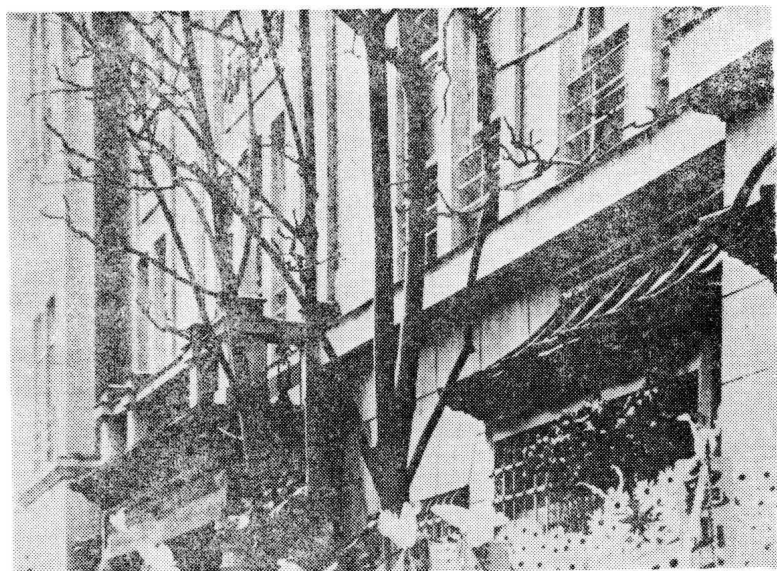
主要参考資料 235

〈折込付図〉菊富士ホテル付近略図

菊富士ホテル平面見取図

文壇資料

本郷菊富士ホテル



菊富士ホテル正面玄関付近

第一章

菊富士ホテル誕生

ある夏の日に

本郷三丁目の四ツ角で乗り物を捨て、本郷通りを東大赤門の方へ七十メートルほど歩み、文京セ
ンターの角を左へ折れる道を、菊坂の通りという。

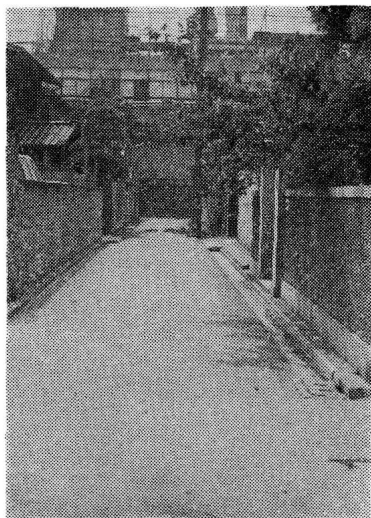
魚屋、八百屋、菓子屋、葬儀屋、そば屋、せんべい屋、本屋、それから何を買っているのか得
体の知れない構えなど、およそ東京のどこにでもある、ありふれた映えないその通りを、三百メー
トルほどもうねうねと行く。

最初の四ツ辻を右へ、急勾配の坂を上りきり、その坂の上の駐車場の横を左へ入ったつき当り
が、これから語る菊富士ホテルの旧跡なのである。

戦前は、文京センターは燕楽軒という有名なレストランであり、急坂のとぼくのつい最近まで文
京税務署であった大きな空き家は、佐藤高女と女子美術学校の建物であったというように変っては
いるが、全体として眺めると、町のたたずまいも、ホテルの跡に建てられている白い四角い建物そ
れ自体も、何となく往時に近い面影があつて、なつかしめるのである。

少女時代の私は、何度この道を往復したことだろうか。それは昭和のはじめに、父の妹の延子
が、菊富士ホテルの長男である羽根田富士雄に嫁いだためである。

あのころたどりつくと、ホテルの三階の窓から、「何々君高文合格」という白い幟がゆらゆらぶ
ら下っているのを見付けて、私はたいそう物珍らしい気持がしたのを覚えている。ひきとめられて
泊る夜もあったが、同じ屋根の下で広津和郎や宮本百合子が起居していたのだとは、知る由もなか
った。



菊富士ホテル前の小路。つきあたり
旧ホテル（現在オルガノ商会）

子供の目からも、当時の菊富士ホテルは、立派な下宿とは思えず、壁に少々の雨じみがあつた
り、渡り廊下の踏み板がしなったりした記
憶がある。暗い玄関には大きな下駄箱がな
らび、応接間には不釣り合いなほど大きな油
彩の女人像があつたが、大正の中ごろ竹久
夢二という画描きが、宿料の代りに置いて
いったものであると、番頭に教えられたこ
とが印象に残っているくらいである。

幸之助というホテルのおじいさんは、小
柄なやせた人で、いつ行っても金縁メガネ

うと、

「まアええわな。もう少し遊んでおいで」

と止め、ご飯を一杯でやめようとする、

「まアええわな。もう少しお上り」

と言って、私がひっこめた茶碗に食べきれないほどのご飯をよそってくれる。

ホテルの茶の間に坐っていると、次から次とちがう顔の親戚の人や、出入りの商人や、雇人たちが出たり入ったりして、目まぐるしかった。そして、食卓はいつも十人ぐらゐが囲むので、その賑



現在の菊坂の通り

を傾けて、新聞を隅から隅まで丹念に読んでいた。宿屋の主人というよりは、学校の先生か、政治家のような感じであった。きくえというお婆さんは、いつもにこにここと笑いを唇のはたに残しながら、大儀そうに太った体を動かして休むことなく、何かと指図していた。

「まアええわな」

というのが口癖だった。もう家へ帰るとい

かさがまた大変であった。祖父母に育てられて昔風の食事に親しんでいる私が、グラタンやミルクコーヒーやアップルパイの味を知ったのは、菊富士ホテル訪問のおり以外ではなかった。

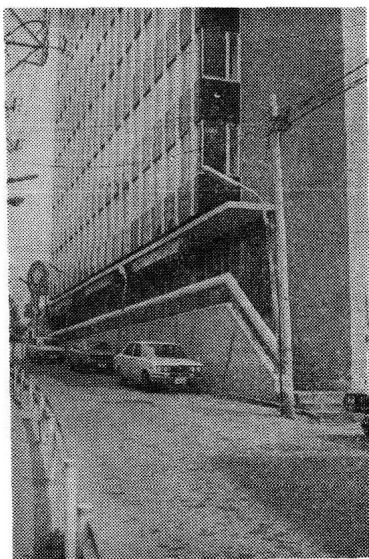
それからおよそ四十年近くも経った夏の日、私は大谷正夫という七十歳の老人とデートをする約束をし、

「燕楽軒のあとで待ち合わせましょう」

ということに相成った。私が約束の時間にかけてみると、鳥打帽にニッカズボンという服装の、眼光けいけいとした立派な顔立ちのその人が、すでに菊坂の通りの入り口に立っていた。

広津和郎の回想の文学「年月のあしおと」に、慶応ボーイのOとして登場する菊富士ホテルの住人が、彼であった。ホテルには大正の末から昭和にかけて、三期にわたって滞在し、菊富士デカダン時代の体験者の一人なのである。

その人の住所は、広津桃子さんが、父和郎の会葬者控のなかから見つけ出してくださったものである。



燕楽軒のあと（現在文京センター）

私たちは、赤門という喫茶店でむかいあった。

「とにかく、あんなに変った下宿屋がこの世に二つとあるでしょうか」

大谷さんは、目を細めて追想した。

「ホラ、あの暗いホテルの玄関に立つと、三番の宇野浩二さんの部屋からは、清元の『権上』が聞こえてきます。あれは、のちに『思ひ川』のヒロインとなった富士見町芸者の村上八重さんの絃です。宇野さんの恋人ですよ。風呂場では番頭が革命歌をくちずさみ、哲学者の三木清は宇野さんの真上の部屋で、岩波の雑誌『思想』に発表する『人間学のマルクスの形態』を執筆中、そして広津和郎さんは食堂で、ホテルの次男の孝夫さんとピンポンをしています。そして通りには若槻内閣の総辞職を知らせる号外を配るはっぴ姿の若者が、鈴をならして走っていきます。昭和二年四月だったと思いますが……」

大谷さんは、第一次世界大戦の際の青島攻略の連合軍司令官、陸軍大将大谷喜久藏の長男であった。父の死後は、亡母の実家である富沢町の木綿問屋、今井九左衛門から毎月百二十円を仕送られ、よその倍は下宿料の高い菊富士ホテルに住ってのんびり暮していた。男爵も辞退して、作家を志したのは、菊富士ホテルの文士たちのかもす怪しい雰囲気に酔ったためだったろう。

「楽しいなんてもんじゃない。のめりこんでいましたネ。ホテル時代が私にとっても、生涯の一番輝かしい日々でしたヨ」